

『山月記』を題材に「生きる」ことの意味を考える

三重県立桑名北高校 石田実貴

高校時代の頑張った経験が「生きる力」を育む

基礎学力がきちんと定着しておらず、授業では集中して教師の話聞くことが難しい生徒たちに、学力を付けるためにはどうすればよいのか。三重県立桑名北高校の石田実貴先生が、授業にアクティブ・ラーニングを取り入れた背景には、そうした課題意識があった。

県内の進学校から同校に赴任した石田先生がまず驚いたのは、生徒の生活態度だ。教師に対する言葉遣いが悪く、授業を妨げるような行為をする生徒もいる状況だった。授業も満足に出来ず、投げやりになりそうになった時、石田先生が思い出したのは、社会の過酷な派遣切りの実態

だ。石田先生は教職に就く前に会社勤めをしており、リーマン・ショックの影響で、非正規社員が次々と解雇されていくのを間近で見た。目の前の生徒たちも、数年後には同じ立場にならないとも限らない……。そう考えた時、彼らにとつて、高校時代は大人が深くかかわってあげられる最後のチャンスなのだと思いが付いた。

「自分は頑張っているけど、社会的な要因でつまづくことがあるかもしれません。そのような時、『高校時代にあれだけ頑張れたんだ』『必ず自分のことを見てくれている人がいる』といった経験や自信があれば、困難も乗り越えられるはず。そのような姿勢でいられる大人になりたいという思いが、私が教職に就いた原点でした。ここで私が諦めたら、生徒たちのチャンスを1つ潰してしまふことになる。もう一度頑張ろうと、心に決めました」（石田先生）

そうした折に出合ったのが、アクティブ・ラーニングだ。専門書を読み、研修会に参加する中で、「この方法なら生徒が学び始めるかもしれない」と可能性を見いだした石田先生は、すぐに実践した。最初の1年間は試行錯誤の連続だったが、生徒に合った教材やプリントに取り組みせるタイミングなどが徐々に分かり始め、2年目にはアクティブ・ラーニング中心の授業に全面的に移行した。

当事者意識を持たせて主体性を引き出す

今回、実践例として石田先生が取り上げたのは、高校の教科書で類出の『山月記』（中島敦著）だ。主人公が虎になるなどのユニークな設定ながら、高校生にはなじみの薄い擬古文で書かれているため、難読漢字が多く、漢詩も登場するというハードルの高い教材だ。この教材を3年生に指導することを想定して作った授業デザインシートが図1だ。

授業展開の特徴は、内容把握に相



三重県立桑名北高校 石田実貴 いしだ・みき
教職歴6年。同校に赴任して4年目。「人の根底にある『成長したい気持ち』を信じ、生徒とかわり続ける」

三重県立桑名北高校

- ◎ 創立36周年を迎える。アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業展開、多彩で魅力的な教育課程の充実など、学ぶ喜びを実感できる学校づくりを進めている。地域の保育所との交流学習は特徴の1つ。
- ◎ 設立 1980（昭和55）年
- ◎ 形態 全日制／普通科／共学
- ◎ 生徒数 1学年約240人
- ◎ 2015年度進路実績（現浪計）
私立大は、静岡理工科大、愛知学院大、愛知工業大、中部大、名古屋芸術大、四日市大、大阪学院大などに延べ28人が合格。短大18人、専門学校53人、就職99人。
- ◎ URL <http://www.mie-c.ed.jp/nkuwa/>

当の時間を充てている点だ。1時間目は、作品を通読してから、3〜4人のグループで、場面ごとに見出しを付けたカードを物語のプロット通りに並べる。グループでの考えがまとまると、グループの代表者であるスマールティイチャーがカードを物語のプロット順に黒板に貼り、学級全体で共有する。スマールティイチャーは「右前に座っている人」などと、活動ごとに先生がランダムに決める。いつ当たるか分からないと

いう当事者意識を持たせ、活動を人任せにしないための工夫だ。

「読解の技術」を体験的に身に付ける

2 時間目には、「主人公がしたかった仕事は何?」「主人公は旅に出た時どうなってしまった?」といった、物語の内容を把握するための一問一答形式のプリントにグループで取り組み、3 時間目からは、段落ごとに内容の読み取りを行っていく。

まず、グループで音読を行う。『山月記』には難読漢字が多く登場する。教科書に書かれている振り仮名以外にも、生徒が読めない漢字があるため、全ての漢字に読み仮名を振ったプリントを教室の各所に貼っておく。グループ内で誰も読めない漢字があれば、スモールティーチャーがそのプリントを見て確認し、読み方をグループ内で共有して音読を続ける。これを約10分間で行った後、学級全体での音読として、生徒の座席1列ごとに1文ずつ音読していく。続いて、石田先生が段落ごとに作

図1 「国語」『山月記』授業デザインシート

授業時数	自校の生徒の特性を踏まえた本時の主な目標 (身に付けさせたい力・姿勢)	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容
1 時間目	場面設定や話の流れを把握する力	技能 思考力・判断力 主体性	3~4人の班をつくる。『山月記』の場面ごとに見出しを付けたカードを班に1セットずつ配布し、本文を読みながら班全員でカードを場面順に並べ替える。最後にどのような順番になったのかを学級全員で共有する。
	仲間と協力して問題を解決する力	協働性	班全員でカードを場面順に並べ替える際は、メンバーで協力して作業する。
2 時間目	内容を大まかに把握する力	知識・技能 思考力・判断力 主体性	「山月記Q&A」のプリントに、本文を読みながら、まずは個別に取り組んだ後、班で答えを共有。分からないところは教え合い、班でプリントを完成させる。完成したら、授業者指名された各班のスモールティーチャー(伝達係)が、授業者に持って行き、採点してもらおう。採点結果は班で共有。
	仲間と協力して問題を解決する力	協働性	班でプリントを完成させる際は、メンバーで協力して作業する。
3~8 時間目	音読する力	知識・技能 主体性・協働性	教科書の本文を場面ごとに拡大し、読み仮名を振ったものを教室の前後左右に掲示しておく。班になり、読んでいく中で読み方が分からない漢字が出てきたら、スモールティーチャーが、掲示してある読み仮名を見に行き、班のメンバーと共有する。
	丁寧に本文を読み取る力	知識・技能 主体性・協働性	場面ごとで作成したワークシートに取り組むことで内容を把握する。個人で取り組んで分からないところがあればメンバーに相談する。授業者が机間巡視をしながら、各班1人のワークシートだけを採点する。採点された生徒が必然的にスモールティーチャーになるので、その生徒を中心に班で共有する。全体で確認しなければならないことや、共有しておいた方が良いことは、適宜全体に向けて授業者が説明する時もある。
(漢詩の部分) 5 時間目	本文中に出てくる漢詩を読み取り、内容を把握する力	知識・技能 思考力・判断力・表現力 主体性・多様性	●音読・暗唱/書き下し文を暗唱することから始めて、白文を読めるまで練習する。 ●現代語訳をする/班で協力して現代語訳をする。文法・句法のレクチャーはしない。難しい語句の意味だけ配布しておき、必要な時に利用する。 ●共有/班で完成させた作品を読み、全員と共有する。
	仲間と協力して問題を解決する力	協働性	班で現代語訳を完成させる際は、メンバーで協力して作業する。
9 時間目	定期考査	知識・技能 思考力・判断力・表現力 主体性・多様性	定期考査の中で『山月記』を読んだ感想を書く。
10 時間目	正解のない問いに仲間と協力して取り組む力	知識・技能 思考力・判断力・表現力 主体性・多様性・協働性	『山月記』から人生を考える。 定期考査時に生徒が書いた感想や、授業中に出てきた生徒の疑問を基に、次の問いを投げ掛ける。 A「人間らしさ、人間の心とは何か」を考え、自分たちで定義をし、「人間らしいのは李徴が哀鬱か」についての結論を出しましょう。 B「幸せとは何か」を考え、自分たちで定義し、「李徴と哀鬱はどちらが幸せな人生を歩いていると思うか」についての結論を出しましょう。 C「なぜ『山月記』は60年以上も前から高校生に読み継がれているのかなぜ教科書に載せ、高校生に読ませようとしているのか」を自由に考えて述べましょう。

進学校の場合は、3 時間目から始めてもよいと思います (石田先生)

進学校の場合は、内容把握に掛ける時間を減らし、残りは大学入試を見据えた小論文の作成や言語活動に充ててもよいと思います (石田先生)

『山月記』の内容把握をしっかりと行っておけば、どのような学力層の生徒でも、このテーマについて考えることは可能です。高校生にはぜひ取り組んでほしい活動です (石田先生)

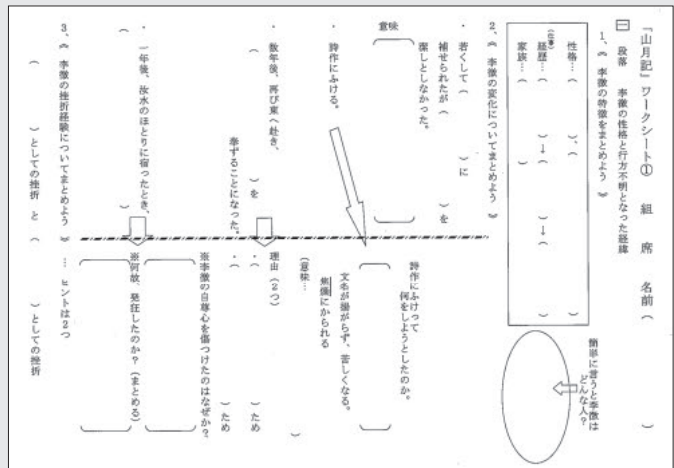
* 石田実貴先生からの提供資料を基に編集部で作成

成したワークシート（図2）にグループで取り組み、内容を深く読み込んでいく。ワークシートは、事実情報を整理するパート、登場人物の行動や心情の変化の理由を考えるパート、そして思考力が求められる発展的な問題のパートで構成され、発展問題の前までは必ず取り組みむように指示している。

授業中、石田先生が内容を解説することは基本的にはない。ワークシートに取り組んでいる時も、先生は机間巡視は行うものの、ほとんど説明しない。生徒がワークシートに書き込む様子を見ながら、例えば、グループの1人の答案をさげなく採点する。すると、採点された生徒がグループの他の生徒に教えるというように、生徒同士で問題を解決できるようにしている。

学級全体で理解が浅いと感じた部分については一斉指導を行うが、その時間も1、2分程度。登場人物の性格や心情、行動の意味などを読解

図2 内容把握のワークシート



*石田実貴先生からの提供資料をそのまま掲載

自分たちの言葉で 分かりやすい現代語訳に

する技術は、ワークや学び合いを通して体験的に身に付けさせていく。

5時間目には、文中に登場する漢詩を学習する。書き下し文の暗唱から始め、次に返り点を打った漢文、最後に白文を読ませるのが目標だ。

まず、書き下し文に読み仮名を振らせ、ペアやグループで何度も音読

をし、学級全体で列ごとに1人1文ずつ読んでいく。生徒は何度も読み聞きする中で自然と文章が頭に入っていくので、最後は文法や句法が分からなくても、白文で読めるようになる。先生は文法や句法の解説をしないうが、書き下し文が頭に入っているので、返り点が苦手な生徒も自然とレ点や二点などの意味が分かるようになるという。最後は、語句の意味を調べながら現代語訳を行う。型通りではなく、「**輟**」を「**リムジン**」と訳すなど、自分が分かりやすい言葉に置き換える生徒もいる。意味が分からない生徒にとっては、他の生徒の現代語訳が助けになり、最終的に全員が漢詩の意味を理解できる。

このように、8〜9時間を掛けて内容把握が終わると、定期考査を行う。問題は基本的な知識・理解を問うものを中心だが、物語の内容をしっかりと把握しているので、理解度や定着率は高いという。

キャリア教育の視点で 作品にアプローチ

キャリア教育的な視点から作品を更に深掘りしていくのも、石田先生

の授業の特徴だ。①「人間らしさ、人間の心とは何か」を定義し、「人間らしいのは李徴か袁慄か」について結論を出す、②「幸せとは何か」を定義し、「李徴と袁慄はどちらが幸せか」について結論を出す、③なぜ『山月記』は60年以上も前から高校生に読み継がれているのかを自由に考えて述べる、の3つのテーマからグループで1つを選び、話し合う。

活動前には、『山月記』が、説話の『人虎伝』を原典にしていることや、高校の教科書で最も長く採用されている作品の1つであることを伝えた。そして、個々で20分程考えてから、グループで30分程話し合い、各グループの結論は次の時間に全体で共有した。

「人生の目的や価値観などは、人に教わるものではありません。自分の人生の主人公は自分自身です。様々な価値観があると知り、生きるとは何かを、自分なりに考えてほしいと思います」(石田先生)

ある生徒は「いろいろな価値観があるということは、いろいろな生き方があって良いということ。自分を大切にするなら隣の人も大切にすべきだし、地球の裏側にいる人も大

切。みんながそういうことを理解すれば、戦争はなくなるのではないかと語ったという。

文字数を指定しなかったにもかかわらず、大半の生徒が200〜500文字の感想を寄せた。「様々な読み方が出来るから、長年読み継がれてきたのだと思う」「登場人物の心情をくみ取るだけではなく、人の幸せや人間らしさまで考えさせられる作品」「グループ活動で、1人で読むだけでは思いもしない意見を知ることが出来た。自分自身も考えるのがすごく楽しかった」など、生き生きとした文章からは、作品への共感、多様な価値観に触れる驚き、考える楽しさが伝わってくる。

持っている力の出し方が分らない生徒たち

授業は内容把握に時間を掛けたら、プリントを多用したりと、同校の生徒の学力に応じた構成としているが、前半の内容把握の時間を短縮し、最後に大学入試まで視野に入れた小論文の作成などの活動も含めること

で、進学校の生徒にも対応できるだろうと、石田先生は考える。

教材の準備は、『山月記』の場合、語句の意味や読み仮名などまでプリントにしていたが、題材によっては内容把握のためのワークに絞るなど簡素化している。平易な文章ならば内容把握を短縮し、最後の言語活動に多くの時間を充てることも可能だ。

今でこそ、生徒の状況に応じて授業を進め、教材を準備できるようになったが、石田先生自身、実践当初は試行錯誤の連続だった。「これはいける」という確信を得たのは、赴任1年目に始めたブックトークがきっかけだった。授業の度に「めんどい」「うざい」を連発する生徒に、「その言葉を口にするだけでは、暴言としか受け止められないけれども、学校をテーマにした本を読み、あなたの思いを400字の小論文にすれば、『暴言』も『主張』に変わり、社会の人たちが耳を傾けてくれるはずだよ」と伝えたところ、生徒は意外にすんなり受け入れ、ブックトークに取り組み始めたのだという。

「生徒はやんちゃで言葉遣いも悪いです、それは力の出し方が分からないからではないかということに気づき、自信が湧いてきました」と石田先生は振り返る。

「静かに座っている授業」だけが理想の授業の形なのか？

石田先生は一斉授業を否定しているわけではない。同校の場合、生徒を授業に集中させ、学習内容を理解・定着させるために、生徒に頭や体を使って活動させる時間が多く必要だったという。

石田先生が疑問に感じているのは、生徒が黙って座っていれば授業は成立しているのかということだ。

「生徒が静かに座り、ノートを取っていたとしても、実は何も身に付いていないというのは、よくあることだと思えます。人間が学ぶ姿には、活動的な姿もあれば、静かに考えにふける姿もあり、時には感情があらわになることもあるはず。『静かに座っている授業』だけが理想の形とする思い込みが、生徒の能力を

開花させる機会を奪っているのかもしれないと思うのです」(石田先生)

同校でも、協働的な学習を行った後や生徒同士で感想を共有した直後など、理解が深まり、意欲・関心が高まっている時に石田先生が説明を始めると、生徒は集中して先生の言葉に耳を傾けるといいます。ただ話を聞いているだけに見えるかもしれないが、それは受け身の態度ではなく、生徒たちの頭の中は活性化していて、能動的に学んでいるのだ。

「よく大人は子どもに、『将来のためにつらい勉強に耐えなければいけない』と言います。確かにそういう面もありますが、もつと大切なのは、『今ここで学んでいる幸せ』を感じられることだと思います。それを教師が言葉で語るだけでは、生徒には響きません。友人同士で学びを深め合う中で、『自分にも分かる』『成長している』と感じ、それが少しずつ自信になって将来へ向かう勇気が湧いてくる。それこそが本当の学びであり、教室という場でしか出来ないことだと思います」(石田先生)